

市民がつくる「環境首都・北九州」タウンミーティング

【 基調講演 】

講師：北九州市長 北橋健治

司会：

大変お待たせいたしました。ただいまより、タウンミーティングを開催いたします。ここで、本日の流れをご説明させていただきます。このあと、北九州市長 北橋健治（きたはし けんじ）より「市民がつくる『環境首都・北九州』」と題しまして、基調講演を行います。

その後、19時10分頃から、パネルディスカッションを行います。パネルディスカッション終了後、会場の皆様からのご意見をおうかがいする時間を設けておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

終了時間は20時30分を予定しております。みなさまのご協力をお願いいたします。それでは、これより基調講演をはじめさせていただきます。北橋市長、よろしくお願いいたします。

市長：

皆様こんばんは。

本日は、皆様お忙しいところ、またお仕事の後のお疲れのところ、多くの方々にご臨席をいただき、本当にありがとうございます。時間は28分ですが、皆様にご報告をさせていただきます。

まず、今月は「北九州市エコマンス」、エコ（環境）、マンス（月間）、たくさんのエコの大きなイベントが次々と開かれます。その中には政府の代表の方、あるいは外国の市長さん、外国の皆様方も含めてオールジャパンの会合が開かれますし、市民の会合もたくさんあります。ということで、市制50周年、大きな節目の年に10月はエコマンスとなっております。

OECD というのはあまり聞きなれない言葉ですが、世界には先進国がヨーロッパ、アメリカなどありまして、アジアでは韓国と日本が入り、34カ国あります。

その世界の先進国がいつも集まりまして、どうすれば地球の経済がうまく回るか、社会が発展するかということを議論している34カ国の選りすぐりの政策通の方が集まっ

で議論している、大変有名な国際機関であります。

ここが、世界で4つ緑の成長「グリーン・グロース」のモデル都市を選んだわけです。その中の1つに北九州市が選ばれました。

さて、OECDはこのたびレポートを発表したのですが、まもなく日本語に訳されたものも今月発表されますが、大変大事な一節を盛り込んでいます。「市民自らが環境への行動を起こしてきた。その市民の環境力が高く評価された」と書いています。

実は、OECDの専門家の調査団が市内に参りまして、いろいろなところを視察してレポートにまとめているわけです。つまり、欧米人が何に注目したか、北九州市民がこれまで環境を大切にみんなで頑張ってきた市民の力が素晴らしいということでございます。

さて、皆様は環境について非常に詳しい方で、専門家の方が揃っております。釈迦に説法ではありますが、簡単にこの歩みを振り返ってみますと、いわゆる60年代に公害が大変深刻に受け止められました。戸畑の婦人会を先頭にして、青空が欲しいという市民運動が始まりました。これが市民環境力の原点であります。そして、それに動かされるように熱意と目標に私どもみんなが心を動かされまして、行政は公害防止条例を企業の皆様と協定を結んでやっていったわけです。そして、公害を克服する過程で素晴らしい技術、人の力がどんどん強くなっていきます。

そこで、世界を見るとみんな公害問題というのは経験していくわけでありまして、その海外の都市に対して色々と貢献をしていこうということで7,000人以上の研修生をこの間受け入れてきましたし、北九州市から民間企業の方と一緒に市役所も出かけて行って公害を克服しました。

例えば、大連の大気汚染は、世界的な成功モデルで青空を取り戻しました。その活動は30年以上続いて現在に至っています。これは、世界中が非常に注目し、そして心から称賛をしている私たち先人の試みであります。

そういうなかで国連から「北九州市は頑張っている」ということで、地方自治体として初めて大きな表彰を頂きました。末吉前市長の時でございます。

そして、平成16年に各界の方にお集まりいただいて、何回も何十回もディスカッションをしまして、市民の総意として、この私たちの街の資産である環境という目標に向かってどのように進んでいくか、そのランドデザインを描いたわけです。この時に「環境首都を目指す」ということが明確に北九州市民の中で確認をされました。それに基づいて私どもは基本計画を作って今日に至っています。

さて、6年半前に私は市長に着任いたしました。当時、日本の環境の市民団体がコンテストやっております、1年、2年、3年と1位であるという嬉しい表彰を受けていましたが、福田内閣が洞爺湖サミットを前にして、突然「我はと思う自治体は手を挙

げよ」と言うおふれが出ました。洞爺湖サミットで地球温暖化防止と言う大変重要で難しいテーマに対して、福田総理のお考えは「国としても全力でイニシアティブを取るけども、やはり地域住民と一緒にになって成果を上げていくのが“環境”である」ということで、地方自治体が成功モデルを作って内外に発信するというものです。

それでは、地方自治体は2050年までの間に、二酸化炭素という地球を温める問題をどのようにしてセーブするか、具体的な未来に向かっての政策、戦略を描いて政府に提出してほしいということで、コンテストによって選んだわけであります。

最初の6つの環境モデル都市に本市は選ばれました。そうやって頑張っていくうちに政府からも物心両面でいろいろなアドバイスもありましたし、ご支援もいただいてまいりました。その中でまた募集がありました。今は「スマートグリッド」、あるいは電力を賢く使うという事を「スマートグリッド」と呼んでいますけども、電力を賢く使うということは、その地域全体がエコに優しい地域になりますので、日本では「スマートコミュニティ」というグリッドよりももう少し大きな概念で募集がありました。

「未来に対して自治体はどのようなプログラムを民間企業と一緒に出してくるか、採点をして決める」四つ選ばれました。その一つに北九州市があります。

今、「東田」という所で世界的に注目されるスマートコミュニティの事業が進んでおります。そして、今から4年前ぐらいになりますが、突然政府高官から私に電話がありました。「OECDで地球環境問題の議論をするが、その時に国がどう動くかが大事だけれども、Cityが大事だ。国境を越えてCity（都市）がどのように連携をし、理想を目指すかということが、この地球温暖化防止というテーマにとって大事である」と。「そこで、OECDは初めて地方自治体の代表を国際会議に呼ぶことにしたので、北九州市はこれが初めてになるけれども行ってみませんか」というお誘いでございます。

わたくしもその時について聞いてしまいました。「旅行費用は国から出るのでしょうか?」、「いや、それは地方自治体で」と言われました。行くべきかどうかと思いましたが、でも、OECDという世界の舞台で北九州市のポリシーを発信できるのは初めてでございましたので、行きました。

それからすると、2年前に突然、OECDから連絡がありました。「これからの世界はグリーン・グロース、緑の成長だ。パリ、シカゴ、ストックホルムと並んで北九州も選びたい。できれば、調査団を送って分析レポートを書きたいけれども、協力してもらえますか。」というお話です。そして、OECDの調査団が来られて、このたびのレポートがまもなく皆さまにも見られることが出来ます。

そして、この間政府は、非常に暖かいご支援をして頂きまして、それは常にコンテストがありました。コンテストに勝ち抜かなければその恩典は受けられません。その一つが「グリーンアジア国際戦略総合特区」であり、そして「環境未来都市」でありました。10人を超える学者さん達の投票によって○・×が付きまして、いずれも最高の得点で北九州市が選ばれて、国から積極支援を受けて今日に至っています。

そして、私どもは今月内外の方々に、さらにそれを発信する「エコマンズ」になるわけです。

環境の原点は市民の環境力だと申し上げました。懐かしい写真がそこにあります。特に外国の方は驚きの声を上げられるのが下の2枚で、よく before・after といいますが、昔どれほど深刻な公害であったか、現在がいかに青い空、きれいな海を取り戻したか、そこには女性（市民の力）の力、大学をはじめ企業の力があつたという誇りとすべき歴史が我々の原点です。

そして、平成 16 年、当時は市民も NPO も企業も役所も、皆が「環境首都づくり」を議論して合意しようということで、「グランド・デザイン」を作っていくわけであり、この中では 1,000 を超える意見、提案が出ました。多くの市民の方々の気持ちをまとめて作ったのが環境首都「グランド・デザイン」であります。

さて、それに基づいて「環境基本計画」というものを作っていくわけであり、常に「市民の環境力」がこの政策目標を実現するための原点であり、第一に位置づける重要なことだと言うポリシーに立って作ってまいりました。

これは、平成 19 年 10 月でしたが、比較的新しい言葉が出てまいります。「世界に広がる低炭素社会づくり」という言葉があります。よく皆さんは「地球が温まっている。そして、生物や人類の生きている環境が大きく変わって、このままでは世界が大変なことになる」という事をご案内の通りです。そこで、地球温暖化を防ぐ重要性について、ずっとこの間議論されて、その一つの到達点が京都議定書であったわけです。しかし、その次の物を作ることで、先進国と途上国との間で意見が一致せず、難航するという大変難しい政治的なテーマでもあります。

これを地球温暖化と言うよりも「低炭素」、そのものズバリの表現をここで使っているわけです。

そして、「循環型社会」、リサイクルは世界が注目するエコタウンが北九州にあります。そして、もう一つ比較的新しい言葉は「生物多様性の保全」と言う言葉が出てまいります。「生物多様性」、私は国際社会から来ている言葉のように感じます。バイオダイバーシティという言葉があるそうです。名古屋でその大きなコップという会議が開かれました。アマゾンのように自然を大切にしている生物多様性の社会が望ましい社会である、ということを行っています。

こういった近年における「低炭素」あるいは「生物多様性」と言う言葉を使いながら、私たちは過去の成果をもとにさらに前進していこうと試みているわけです。

さて、市民環境力の事例ですが、まず「ESD」の取り組みをご紹介させていただきます

す。これも外国語です。エデュケーション（教育）、そして SD という言葉が日本人には馴染み難い言葉かもしれません。サステナブル（持続可能な）、デベロップメント（発展）、これは日本人の語感からするととっつきにくい言葉です。国際社会の中で先進国も途上国も丁々発止議論する中で、これから人類が歩む社会はサステナブル、ずっと続いていく社会でないといけないということです。この ESD というのは、環境を良くすることに加えまして、様々な人間社会の価値をより高めていくという、理想的な人間社会を築いていくという思いも込められていると思います。

今日、寺坂カタエ先生を始めとして、市民の方や企業の方、大学の先生方、各界の方で運動を続けていただいております。

さて、これは国連の推奨した活動でございまして、特に大きな成果をあげているところ、期待されているところと言うことで、RCE という拠点を国連が決めておりまして、日本で 4 番目に選ばれたのが本市です。国連の大学が色々とサポートをしてくれています。

ここでは市民、各界のみなさんと指導者、コーディネーターを育てたり、実践学習を行ったり、つまりエデュケーション（学習・教育）です。ユネスコスクールであったり、藍島での体験学習であったり、いろいろと多彩な取り組みを展開して頂いております。

今年は国連がこの ESD を提唱して 10 年になりますので、大きな国際会議の節目という事ではありますが、北九州でもその会議が開かれる予定でございます。

次に、市民太陽光発電所（メガソーラー）、「市民の皆さんの手によるメガソーラー」を響灘につくりました。

内外で 100 万人くらいの方が視察に来られ、日本で最初に生まれ、最大規模の資源循環のモデル基地です。響大橋を渡った所に（ここにはもう 1 本新しい橋が出来ていますが）、ビオトープがオープンしております。そして、ここに資材もすべて地元産、地産地消の環境版をやったわけです。地元の企業の技術力を使って、こうやって寺坂先生をはじめ、女性の各界の団体皆様方に寄付を集めていただきまして、市債を発行して買っていただいたりしてお金を作って完成したのが、「市民ソーラー発電所」であります。すでに起工いたしました。

今年は 1,000 万円の収益ありますので、市のシンボルツリー（イチイガシ）を、小中学校に植えていくことに使う予定です。寺坂先生をはじめ女性団体からは、6,055 人の方々のありがたい貴重なご寄付をいただいております。ありがとうございました。

次に環境首都検定でございまして。

これは、多くの方々に環境問題に気軽に楽しく接していただきまして、市民のそういったエコを大事にする裾野が広がっていくことを期待して始めております。今年で 6 回目でございます。県外からも受けに来られておりまして、だんだん受験者が増えてまいりました。昨年は 2,000 人を超えております。

学校や企業、地域などで、団体で受けていただく方もいます。今年は12月15日に西日本総合展示場で企画をしています。私は2回受けまして、いずれも100点ではございません。申し訳ないことだと反省しております。3度目の正直で挑戦したいと思っています。

さて、次に環境学習サポーターの皆様の活動を紹介させていただきます。

これは、市民の皆様がエコを学習したり、あるいは活動する時に助言をしたり、サポートするボランティア活動の皆様です。場所は環境ミュージアム、東田を拠点にしておりまして、サポーターの数は65名いらっしゃいます。ここで出張講演をしたり、工場や浄化センターなどの案内をしていただける、そういう活動をして頂いております。工作あるいは化学実験、クイズ、わかりやすい手法を用いて、年齢に応じて楽しくお伝えいただいております。小中学校や市民センターの出張ミュージアムでも活躍して頂いております。

次に、市民環境力の成功モデルであります、各地域で取り組まれていることに、私も心強く関係者の皆様に敬意を表させていただきます。

今日は、そのなかの有名な成功モデルの一つであります、小倉南区の中谷地区です。「街づくり構想」の中にエコを盛り込んでいるわけです。地域住民をあげて、里地、里山の自然を大事にしていこう、文化を継承していこうということで、活力のある地域を目指すというコンセプトです。

放置竹林というのは山の活力を弱めます。その竹林の竹を伐採してヒノキやクヌギを植えるという活動です。そして、竹を切って炭にする。炭は活性炭として川に入れると水質を浄化するという大きな役割があります。そこに色々な微生物が付いたり、栄養分が付きます。しばらくしてそれを引き上げて、細かく竹炭を砕きまして土に混ぜるとそれが土を肥沃にする効果があるわけです。

そういうことで、いろいろとやられておりまして、漬物コンクールを行ったり、あるいはウォーキングマップを使って楽しく自然の中で市民の皆様がのびのびと過ごせる、そういったことを、一生懸命に町をあげて取り組んでおられます。

さて、行政の取り組みの一つですが、ふれあい花壇・菜園事業です。

これは、2年前に始めたことですので最近のことです。市有地と言うのは、なかなか売れない小さなところがいくつかあります。それをただ持つておくのではなくて、売る予定でないところを無償で開放するということを決めたわけです。おそらくこれは日本で初めての試みだと思います。そこに、年長者から子供まで、一緒に汗をかいて花壇や菜園を作るというコミュニケーションの場を提供する。まち中に森を作っていくプロジェクトとしてスタートしています。

さて、エコマンズの紹介でございますが、北九州エコマンズということでいろいろな行事を行います。ここに新しいものがあります。「ブラックていたん」と呼ばれているものです。まだ皆様の前には出ていませんが、そのうち出てまいります。口元がかわいいのですが、西日本工業大学の女性で、デザイン科の方が発案されたものがコンテストで選ばれています。エコという風に見えます。ブラックていたんには、エゴと書いてあり、これから登場してきます。

エコマンズではいろいろな行事を行います。例えば、エコライフステージは、皆様のご支援のおかげで、市民、NPO の自主的な企画運営です。市民環境力を発揮する最大のもので、今年で 12 年目です。西日本最大級のエコライフのイベントだと言われています。103 団体が出展されるということでございます。2 日間で 15 万人を超える方が参加をされるということでもあります。

次に、ごみの減量化とリサイクルの推進です。

これからは、「雑紙」を市民みんなでリサイクル用に回収していこうということです。これまで新聞紙などのように、古紙回収ということでいろいろな事業に取り組んでいたのですが、なぜ「雑紙」だけを取り出すのかという一つの例は、ここにトイレットペーパーを持ってまいりました。実はこれにはかわいい模様がありまして、うまく行きますと市民の皆様がたくさんお披露目できるようになります。これは最高に優しい紙の質です。マスコットがここに入っておりまして、ヒット商品になるのではないかと期待しています。肌に優しいトイレットペーパーです。昔私の小さい頃は、新聞紙を丸めて拭いていた時代があります。たまにゴワゴワとした紙が出るときは、お客様が来られる時でした。あれから思うと人間は長生きするものだなあと思います。最高に肌に優しいトイレットペーパーを作るために、「雑紙」ということで分別されて集まってきますと、うまく回ります。

ということで、これからコンテスト始めたいと思います。それぞれの小学校校区ごとに集めていただいて、その校区ごとに何世帯いращやるか、どれだけ集まったかによってグランプリというものを考えています。これによって、リサイクルはさらにバージョンアップします。日本中から注目されると思います。

さて、この機会に「水切り」ということも申し上げたいと思います。

生ごみがたくさん出ます。あのなかに生ごみは半分ぐらい入っています。生ごみの 8 割は水です。それは水切りをすると軽くなります。収集する時でもずいぶん作業が効率的になります。同時に、ごみ発電は年間 12 億円の発電をしているわけです。そのときに、袋の中の 4 割ぐらいが「水」なんです。そのために熱カロリーが落ちます。そうすると、発電効率も落ちます。もし、みんなで「水切り」を徹底してやっていると、作業が効率的になって、そしてなによりも発電量が増えるわけです。その分は市民に還元さ

れる。そういった「水切り」もこれからの市民環境力が試される大きなテーマだと思います。

時間があと 1 分半になりました。

国際会議の開催「エコマンス」ということです。どんな会議をやるかといいますと、今ここに「環境未来都市」という言葉がありますが、福田内閣の時に二酸化炭素を減らす未来に対するプログラムで選ばれたのが、今現在 13 の環境モデル都市です。加えて、低炭素だけではなく高齢化、少子化など社会の質を高めるという視点も加えたものを、あえて「我はと思うものは手を挙げよ」と、学者さん達のコンテストで、私どもは選ばれたわけです。

現在、「環境未来都市」を目指すグループが日本にはたくさんあります。県から市町村からあります。そして、国も環境省、経済産業省、外務省、みんなが関係しています。外郭団体もそうです。シンクタンクもそうです。そのオールジャパンの環境都市を目指すグループが評議会を作っています。このフォーラムを行うということです。

会長は北九州市長が仰せ使っておりまして、そういった意味でも内外の方がここにお集まりになります。この方は、OECD のトップですが、こういう英文のものを手渡していただいております。翻訳権は OECD にありまして、まもなく翻訳版が完成する予定であります。

かつて、1985 年の時に、「from gray to green city」という 1 枚のレポートが出ています。灰色の街から緑色の街へ、それ OECD が初めて北九州市を賞賛したレポートの一節です。今度は 1 冊のレポートが OECD から出されたわけです。

都市が発展するときには人が増えて雇用が生まれて活力が生まれるときに、いろいろなことを同時にやらなければなりません、やはりその街の長い間の市民の営みが素晴らしいという評価を受けることは、大変にこれは励みになるし重要なことだと思っています。私たちは、市民環境力、私たちの諸先輩、お集まりの皆様のご尽力によって、世界の舞台に第一歩を踏みだそうとしているのです。

これからもよろしくご指導をお願い申しあげまして、報告を終わらせていただきます。ご静聴、有難うございました。

司会：

北橋市長、有難うございました。

引き続きパネルディスカッションにうつりますが、その前に休憩を挟みたいと思います。パネルディスカッションの開始時刻は、19 時 10 分でございます。

お時間までにお席にお戻りくださいますようによろしくお願いいたします。